

雪庭福裕の傳について

福 島 重

はじめに

金末元初の華北佛教界において活動した僧として、萬松行秀（一一六六―一二四六）・海雲印簡（一二〇二―一二五七）の二人は、夙に知られている。⁽¹⁾萬松は燕京地區を中心に活動し、名臣と稱される耶律楚材（一一九〇―一二四四）の師として名高く、海雲は太宗の知遇を得て、勅により大慶壽寺などの名刹に歷住し、一二四七年（定宗三年）には憲宗から佛教界を統領する任務を受けた人物であつて、ともに當時の華北佛教界の中心的人物であつた。

その萬松の弟子の一人に、海雲と同年代の僧である雪庭福裕⁽³⁾がいる。彼は憲宗期に行われた道佛論争の記録に佛教側代表としてその名が見えることから、重要人物の一人と目され、その傳記についてもすでに考察されており、萬松・海雲の後を繼いでモンゴル帝室とも關わりを持ち、さらに佛教界を統括する立場におり、その活動に深く關與した僧であつたことが明らかにされている。⁽⁶⁾しかし、それらはいくまでも道佛論争との關連においてのみ言及されるものであつて、福裕自身の動向を主題として取り扱つた研究はみられない。また、從來の考察も『五燈會元續略』などの典籍史料を利用したもので、福裕の傳記に關する一次史料として有益と思われる「大元贈大司空開府儀同三司追封

晉國公少林開山光宗正法大禪師裕公之碑」(以下、「裕公碑」)は、十分に活用されていないようである。

そこで本稿では、僧の傳記を詳細に検討することは、対象とする人物の事跡を理解するだけでなく、當時の佛教界の状況を把握するための一手段ともなるとの観点から、この「裕公碑」および關連する碑刻に見える記事と、從來用いられてきたいわゆる僧傳などの典籍史料とを對比しつつ、福裕の動向を跡付けてみたい。

一 碑刻に見える記事

福裕に關する記事がある碑刻として注目しなければならないのは、「裕公⁽⁸⁾碑」である。これは、延祐元年(一二三二四)、門人の慧慶の建、門人の普就そして集賢大學士陳顥の立石である。常盤大定氏による『支那佛教史蹟踏査記』⁽⁹⁾では、嵩山少林寺鐘樓の後に存すると紹介されており、『洛陽名碑集釋』⁽¹⁰⁾によれば、現在も、河南省登封市の嵩山少林寺の慈雲堂院内にあるとされる。螭首龜趺を含めた高さは三八五センチ、幅は一四〇センチ、厚さは四三センチ。碑陽の題額は「皇元贈大司空晉國公少林大宗師裕公道行碑銘」、題名は「大元贈大司空開府儀同三司追封晉國公少林開山光宗正法大禪師裕公之碑」で、碑陰は「少林開山雪庭宗派」と題され、福裕の門弟の名が列記される。

さて、碑陽の題款をみると、

翰林學士承旨 資善大夫 知制誥 兼修國史 臣程鉅夫奉勅撰

集賢侍講學士 中奉大夫 臣趙孟頫 奉勅書

嘉議大夫 禮部尙書 臣郭貫 奉勅篆額

と、立石に關わった三名の官職と名前が記され、さらに、それぞれに「奉勅」という言葉が記され、皇帝の命によつて碑刻がなされたことがわかる。ここで、まずその三名の經歷がどのようなものであつたのかを確認しておきたい。

撰者程鉅夫⁽¹¹⁾（一二四九—一三三八）の傳は『元史』卷一七二に收められている。それによると、世祖によって見出され、翰林修撰・集賢直學士兼祕書少監等を歴任し、至元二〇年（一二八三）には、翰林集賢學士となり、至大四年（一二三二）には、翰林學士承旨となった。さらに彼が世祖没後も成宗・武宗・仁宗からも信任を受け、主に翰林學士として、碑刻の撰文、詔勅の起草をした。延祐五年（一三二八）、年七十にして卒したという。

書者は趙孟頫（一二五四—一三三三）、傳は『元史』卷一七二にある。字は子昂。彼の仕官は、至元二十三年（一二八六）、當時、行臺侍御史であつた程鉅夫が、命によつて江南に賢を探し、彼を含めた二十名餘を推薦したことによる。その一年後には兵部郎中に、二十七年には集賢直學士に進んだ。その後地方官を歴任し、至大三年（一二三〇）京師に召かれ、翰林侍讀學士に進む。皇太子時代の仁宗がその名を知り、即位に及んで集賢侍講學士・中奉大夫となり、延祐元年（一三二四）、集賢學士・資德大夫に、三年七月、翰林學士承旨・榮祿大夫・知制誥・兼修國史となった。至治二年（一三三二）六月に、年六十九で卒した。趙孟頫は特に書家として名聲があり、仁宗期において重用された人物である。また、傳には程鉅夫との關係が後年まで保たれていたことが記されている⁽¹²⁾。

篆額者は郭貫（一二四九—一三三一）で、傳は『元史』卷一七四に收められる。字は安道、保定の人。才能が認められて推薦され、樞密中書の掾となった。至元二十七年（一二九〇）、監察御史に進み、大德八年（一二三四）、集賢待制となり、翰林直學士に進む。さらに至大四年（一二三二）には、禮部尙書に除せられ、嘉議大夫を授かり、皇慶元年（一二三二）、翰林侍講學士に遷った。至順二年（一二三一）、年八十二で卒した。

この三人の経歴と、「裕公碑」の題款に見える官職を對照すると、程鉅夫は至大四年（一二三二）に進んだ翰林學士承旨、趙孟頫は仁宗即位の際（至大四年）に進んだ集賢侍講學士・中奉大夫、郭貫も同年に進んだ禮部尙書と記されている。趙孟頫は延祐元年（一二三二）に集賢學士となり、郭貫は皇慶元年（一二三二）には翰林侍講學士に選っているから、碑に記されている官職は至大四年（一二三二）から皇慶元年（一二三二）のものであることが察せられる。そ

して本碑の本文の冒頭には、

皇慶元年春、集賢大學士榮祿大夫臣陳顥奏請、封贈少林開山住持光宗正法大禪師福裕、制贈大司空開府儀同三司、追封晉國公。命詞臣文之碑。

とあり、皇慶元年（一二三二）に集賢大學士陳顥が上奏したことにより福裕が追封され、それと同時に程鉅夫らに勅命が下った、ということが分かる。その集賢大學士の陳顥の名は碑陰にも、

集賢大學士榮祿大夫廓然居士陳顥

と記されてその名が見えるとともに、官職の後に居士號が入る。陳顥の傳は『元史』卷一七七に收められており、仁宗即位にあたって集賢大學士となったとあるが、佛教との関わりについては記されていない。⁽¹⁴⁾

次に、碑文中の福裕の事跡として記される文章を記載の順序に従って番號を附し、以下に列挙する。

①歲乙巳（一二四五）、世祖潛邸、命師少林大作資戒會。

②戊申（一二四八）、定宗諱住和林興國。未朞月、憲宗召詣帳殿、奏對稱旨。俾總領釋教、授都僧省之符、優復僧尼、得廢寺二百三十有七區。

③庚申（一二六〇）、世祖卽祚。因論辨僞經、馳駟以聞、火其書、仍襲爵、賜光宗正法之號。時萬壽祖席、無可當之者、衆請師主之。

④尋分建和林・燕薊・長安・太原・洛陽、爲五少林。

⑤始終萬壽十四夏、主護之力居多。既老、倦於接納、歸棲嵩曜。未久、示微疾、書偈告終、俗壽七十三、僧臘五十二。

⑥幼遭世變、瑩然無依。道逢老比丘、勸以學佛曰、能誦法華足矣。師曰、佛法止是乎。比丘異之、與偕謁休林古佛

於僊巖、曰此龍象種也。當爲大器。卽爲祝髮授具、與雙谿廣公同執事者七年。

⑦遊方來燕、親炙萬松師又十年。

⑧其住少林也、萬松老師實爲之主。屬嵩少煨燼之餘、暫憩緱氏之永慶。

⑨師字好問、以雪庭自號。太原文水張氏子。

⑩九齡入學、日了千言、

⑪門人慧慶以師平昔著述刻梓、既壽其傳、仍以道行碑、輒請於上。

これらの記事を見ると、事跡の記述が年次の順に配列されていないこと、また、③萬壽寺に遷ったこと、④五少林を建立したこと、⑦萬松へ参じたこと、⑧少林寺に遷ったことについては、時期が記されていない。

ところで、前出の「裕公碑」以外にも、福裕の名前を記す碑刻は散見する。⁽¹⁵⁾ その中でも特に重要と思われるものは、先の記事⑪に名前が見える、慧慶の功業を記した「正宗弘法大師大名僧錄慶公功行之碑」(一二三二八年立石、以下、「慧慶碑」)⁽¹⁶⁾である。そこには少なからず福裕の事跡、或いは彼の事跡とも思われる内容が記されるので、その記事を挙げると、

丙辰(一二五六)、雪庭主京師延慶、有領攝之命……

壬戌(一二六二)、雪庭復命定住懷州柏巖・五里化成等寺、師從之。甲子秋、還少林。

乙丑(一二六五)、嵩少有寇禦之擾、既珍法王、因亦蕪廢、雪庭請復庵、兼住其寺而經理之……

癸酉(一二七三)秋、(慧慶)陞提點、如京師上言總統所、乞雪庭佚老。少林從之。甲戌(一二七四)夏、抵其寺。

乙亥(一二七五)秋、雪庭圓寂、實七月二十日也。十一月、萬壽遣僧迎其柩、師護喪葬之漆園。

というもので、いずれも「裕公碑」には記されていない事柄である。そして「裕公碑」立石の経緯についても、

庚戌（一二二〇）、復如京師、爲雪庭請諡碑銘、暨護持院門事、武宗皆賜之。

と觸れられており、「裕公碑」⑪の記述は一二二〇年（庚戌、至大三年）の事であったとする。さらに注目すべきは、同じく「裕公碑」⑪に記される一二二〇年の慧慶の上奏は、「慧慶碑」によれば、武宗によって許可を得たとあるが、「裕公碑」は、延祐元年（一二三四）、すなわち仁宗期に立石されたと記すことである。

この時期の情況を見ると、一二三一年一月に武宗が崩じ、同年三月に仁宗が即位するまでの一月の間に、佛教を統括する制度に變革があつた。それは『元史』卷二四・仁宗本紀・至大四年に、

（至大四年二月）丁卯、……罷總統所及各處僧錄・僧正・都綱司、凡僧人訴訟、悉歸有司。

と記される釋教都總統の廢止のことである。慧慶が上奏した一二三〇年と「裕公碑」が立石された一二三四年というのは、後で考察する福裕の卒年（一二七五年、至元二年）と時間的隔たりがあることも含め、「裕公碑」の立石が、政治制度の變革と、何らかの關係があつたとも考えられるので、留意しなければならない。

二 典籍史料とその系統

最初にも述べたが、福裕に関する傳は、明・清代に編纂されたいくつかの典籍史料に收められる。その記事をみつゝ、併せて傳の系統を確認したい。

福裕の傳が掲載されているものを、編纂年代順に並べると、次のようになる。

淨柱編『五燈會元續略』卷一（明崇禎十五年～十七年《一六四二～一六四四》編纂）

（新纂大日本續藏經《國書刊行會》八〇卷 p.0456b～）《以下、X.T.80, p.0456b～と表記する》

明河編『補續高僧傳』卷二一（明代編纂）（X.T.77, p.513a～）

裕の傳記資料

e	f	g	h	i
續燈存彙	續指月錄	宗統編年	續燈正統	五燈全書
西京少室雪庭福裕禪師	西京萬壽雪庭福裕禪師		順天府萬壽雪庭福裕禪師	西京少室雪庭福裕禪師
清 康熙四年 (1665年)	清 康熙十九年 (1680年)	清 康熙二十九年 (1690年)	清 康熙三十年 (1691年)	清 康熙三十六年 (1697年)
通問編・施沛彙集	聶先編	紀蔭撰	性統編	超永撰・超揆校閱
			生宋寧宗嘉泰癸亥。	
	師五齡解語。	五齡解語、日了千言。		五齡解語
八九歲、一日十行。	九歲入學。	九歲入學、一日十行。	九歲日誦千言	九歲入學
遭亂父兄離散、孑然無依。	遭亂喪家、道逢老僧。	遭亂喪家、道逢老僧。	未幾、遭世變、失天倫所在。孑然無依。	未幾。遭世變
遂偕往仙岩、謁休林古佛曰、此兒龍象種也。得侍巾瓶。他日必成大器。林納之、乃爲祝髮受具戒。	遂偕謁休林古佛於仙巖。曰、此子龍象種也。得奉巾瓶。他日必成大器。林欣納之、乃爲祝髮受具。	遂偕謁休林古佛於仙巖。曰、此子龍象種也。得奉巾瓶。他日必成大器。林欣納之。乃爲祝髮受具。	偕謁休林古佛於仙巖。古佛納之、爲祝髮受具。	遂偕謁休林古佛于仙巖。曰、此子龍象種也。得奉巾瓶于左右、他日必成大器。古佛欣納之、乃爲祝髮受具。
與雙溪同服勤七載。	遂與雙溪廣公、同參者七年	遂與雙溪廣、同參者七年。		與雙溪廣、同事者七年
		壬午十五年、禪師福裕、參萬松祖、印可之。	當嘉定甲申、與雙溪廣、同事者七年	
萬松住報恩師、……復親炙數載。	次參萬松秀禪師。……從此親炙十年。		參萬松於燕之報恩、……於是親炙者十年。	時萬松住燕之報恩。……從此親炙者十年。
		壬辰五年、萬壽祖退居從容庵、禪師福裕、補住萬壽。		
後住少室。	值壬辰之變、祖利荒蕪。朝命以師補之。尋承萬松海雲、重以尺牘相招。	時元太宗破汴、祖利荒蕪。祖退居從容庵、朝命以師補之。	值壬辰之變、祖利荒蕪。尋承萬松海雲、見招遂有少林之命。	值壬辰之變、祖利荒蕪。尋承萬松海雲見招、遂有少林之命。
		丁酉嘉熙元年、曹洞第二十世雪庭祖嗣宗統。雪庭祖奏對稱、旨詔總領釋教。		
世祖潛邸、命師設大資戒會。	世祖潛邸、命師作資戒會。		元世祖居潛邸、命師作資戒。	元世祖潛邸、命師作大資戒會。

表一 雪庭福

	西暦	a	b	c	d
		裕公碑	五燈會元續略	補續高僧傳	繼燈錄
題名			西京少室雪庭福裕禪師	元 雪庭裕和尚傳	西京少室雪庭福裕禪師
		元 延祐元年 (1314年) 程鉅夫撰	明 崇禎十五年～ 十七年編纂 (1642 ～1644年) 淨柱撰	明代 (序文には 「崇禎中」とある) 明河撰	清 順治八年 (1651年) 永覺元賢著
1					
2	1208				師五齡解語、日了 千言。
3	1212	九齡入學、日了千 言	九歲入學	九齡入學、日了千 言	
4	1213～	幼遭世變、孑然無 依。	未幾、適遭前金貞 祐倣擾、失天倫所 在、孑然無依。	漸長遭世變、孑然 無依。	未幾適遭世難、喪 失天倫。
5		偕謁休林古佛於僊 巖、曰此龍象種也。 當爲大器。卽爲祝 髮授具、……	遂偕謁休林古佛於 仙巖。曰、此子龍 象種也。得奉巾櫛 於左右、他日必成 大器。古佛欣納之、 乃爲祝髮授具。	偕謁休林古佛於僊 巖、曰此龍象種也。 當爲大器。卽爲祝 髮授具……	遂偕謁休林古佛於 仙巖。曰、此子龍 象種也。得奉巾櫛 於左右、他日必成 大器。古佛欣納之、 乃爲祝髮授具。
6		與雙谿廣公同執事 者七年。	遂與雙溪廣公、同 執務者七年	與雙谿廣公同執事。	遂與雙溪廣公、同 執務者七年
7	1222				
8		遊方來燕、親炙萬 松師又十年。	萬松住燕之報恩、 ……從此親炙者又 十年	觀方至燕、依萬松 老人最久	萬松住燕之報恩師 ……之親炙十年。
9	1232				
10		其住少林也、萬松 老師實爲之主。屬 嵩少煨燼之餘、暫 憩維氏之永慶。	值壬辰之變、祖利 荒蕪、尋承萬松海 雲、重以尺牘見招、 遂有少林之命。		值壬辰之變、少林 祖利荒蕪、上以師 補之。尋承萬松海 雲、重以尺牘
11	1237				
12	1245	乙巳世祖潛邸、命 師少林大作資戒會。	世祖潛邸、命師作 大資戒會。	世祖居潛邸、命師 入少林、作資戒會。	世祖潛邸、命師作 大資戒會。

		戊午六年。元廷詔 辨正焚燒道藏偽經、 加雪庭祖師號。		
戊申、詔住和林 興國。			會元定宗戊申、詔 住和林興國。	定宗戊申、詔住和 林興國。
	憲宗詔詣帳殿、奏 對稱旨、俾總領釋 教。		辛亥憲宗徵、至北 庭行在所、問道言 簡帝心。	未期月、憲宗徵至 北庭行在所、問道 稱旨。
世祖卽祚、因論 辨偽經、師馳驛 以聞。火其書。賜 光宗正辨之號。	世祖卽祚。因論辨 偽經、馳驛以聞、 火其書、賜光宗正 法之號。		庚申、元世祖踐祚。 俾師總領釋教、仍 賜光宗正辨禪師號。 ……	庚申、世祖踐祚。 俾師總領釋教、 ……仍賜光宗正辨 禪師號。
時萬壽祖席、衆 復請師主之。	時萬壽祖席乏人、 衆請師主之。		時萬壽祖席。衆請 師主之。	時萬壽祖席、衆請 師主之。
			至元辛未春、詔天 下釋子大集京師。	至元辛未春、詔天 下釋子大集于京師
晚年退居嵩陽。 乙亥七月二十日、 示微疾、集衆書 偈而逝。世壽七 十三、僧臘五十 二。塔於所居之 西隅。	既老、勸於接納、 歸棲嵩陽。至元乙 亥秋、示微疾、書 偈告終。塔於寺之 西隅。		既老、倦於接納、 歸隱嵩陽焉。…… 乙亥秋七月二十日、 示微疾、書偈告終。 壽七十三、臘五十 二。塔於寺西塢。	既老、勸于接納、 歸隱嵩陽焉。…… 乙亥秋七月二十日、 示微疾、書偈告終。 俗壽七十三、臘五 十二。塔于寺之西 隅。
			後至仁宗履位、初 贈號追封。命詞臣 撰文表其塔。	後至仁宗履位、初 贈號追封。命詞臣、 撰文表其塔。

以降に編纂されたc-iにのみ見える記載についてはゴシック體で表記している。

13	1246				
14	1248	戊申、定宗詔住和林興國	戊申、詔住和林興國	又被太宗詔住和林興國。	戊申詔住和林興國
15	1251	未葦月、憲宗召詣帳殿、奏對稱旨。俾總領釋教、授都僧省之符。	未期月、憲宗召詣帳殿、奏對稱旨、俾總領釋教。	辛亥、憲宗徵至北庭行在所、累月問道、言簡帝心。	未期月、憲宗召詣帳殿、奏對稱旨、俾總領釋教。
	1255~1256	丙辰、雪庭主京之命……（慧慶碑）師延慶、有領攝			
16	1260	庚申、世祖即祚。因論辨偽經、馳驛以聞、火其書、仍襲爵、賜光宗正法之號。	庚申、世祖即祚。因論辨偽經、馳驛以聞、火其書、仍賜光宗正辨之號。	泊世祖踐祚、命總教門事、賜號光宗正法	庚申、世祖即祚。因論辨偽經、馳驛以聞、火其書、仍賜光宗正辨之號。
17		時萬壽祖席、無可當之者、衆請師主之。	時萬壽祖席、無可當之者、衆請師主之。		時萬壽祖席、無可當之者、衆復請師主之。
18	1271	至元八年春、詔天下釋子大集於京師。	至元八年辛未春、詔天下釋子大集於京師。	至元八年春、詔天下釋子大集於京師。	
19				時少林擅席、萬松海雲爲之請、上目師曰、師昔主資戒會、於是有緣……。	
	1274	甲戌夏、抵其寺（少林寺）。（慧慶碑）			
20	1275	既老、倦於接納、歸棲嵩陽。未久、示微疾、書偈告終。俗壽七十三、僧臘五十二。	既老、勸於接納、歸棲嵩陽。乙亥秋七月二十日、示微疾、書偈告終。俗壽七十三、臘五十二。塔于寺之西隅。		後師既老、歸棲嵩陽。乙亥秋七月二十日、示微疾、書偈告終。俗壽七十三、臘五十二。塔于寺之西隅。
21	1311			至仁宗履位初、贈師司空開府儀同三司、追封晉國公。仍命詞臣、撰文表其塔。	

※「表一」b～iのうち、「裕公碑」と違う記載の初出箇所の下線を引き、『五燈會元續略』

表二 雪庭福裕の傳記の問答部分

	A		B		C		D		E		F	
	五燈會元續略		續燈錄		續燈存案		續指月錄		續燈正統		五燈全書	
1	僧問、如何是祖師西來意。				僧問、如何是祖師西來意。		僧問、如何是西來意。		僧問、如何是祖師西來意。		僧問、如何是祖師西來意。	
2	師曰、待乳峰點頭、卽向汝道。				師曰、待乳峰點頭、卽向汝道。		師曰、待乳峰點頭、卽向汝道。		師曰、待乳峰點頭、卽向汝道。		師曰、待乳峰點頭、卽向汝道。	
3	問、如何是向上尊貴一路。		僧問、如何是向上尊貴一路。		問、如何是尊貴一路。		問、如何是向上尊貴一路。		問如何是向上尊貴一路。		問如何是向上尊貴一路。	
4	師曰、漁歌驚起沙汀鷺、飛出蘆花不見踪。		師曰、漁歌驚起沙汀鷺、飛出蘆花不見踪。		師曰、漁歌驚起沙汀鷺、飛出蘆華不見踪。		師曰、漁歌驚起、沙汀鷺。飛出蘆花不見踪。		師曰、漁歌驚起、沙汀鷺。飛入蘆花不見踪。		師曰、漁歌驚起、沙汀鷺。飛出蘆花不見踪。	
5			問、過界不曾識。雪峰答何處不是、石霜因甚不契。									
6			師曰、從來孝子歸爺名。僧參。師問甚處人。									
7			曰、青州。									
8			師曰、識得趙州布衫否。									
9			曰、趙州布衫、近被人裂破了也。									
10			師曰、因甚裂破。									
11			曰、風流不在著衣多。									
12			師、便打。									
13			曰、因甚打某甲。									
14			師曰、咄風流在甚麼處。									
15												
16									問達山開路。遇水安橋時如何。			

17					師曰、四十九年空費力、一千七百枉施功。	
18					曰、如何得超然、獨拔今時去。	
19					師曰、蓬山開路、遇橋渡水。	
20					問僧面壁石、有人看見達磨麼。	
21					曰、今日幸遇和尚。	
22					師曰、壬戌子亦幸遇、上座遂打。	
23					僧作禮曰、恩大難酬。	
24					師擲下杌曰、腰殺潁州牛。	
25					問、九年面壁時如何。	問九年面壁時如何。
26					師曰、官不容針。	師曰、官不容鍼。
27					曰、一花五葉時如何。	曰、一花五葉時如何。
28					曰、私通車馬。	師曰、私通車馬。
29					曰、怎麼新豐一曲。因師唱出也。	曰、怎麼新豐一曲。因師唱出也。
30					師曰、誰買黃金鑄子期。	師曰、誰買黃金鑄子期。
31	師問僧、達源不達、性海非達、且道在甚麼處。	師問僧、達源不達、性海非達、且道在甚麼處。	師問僧、達源不達、性海非達、且道在甚麼處。			師問僧、達源不達、性海非達、且道在甚麼處。
32	僧、不契。	僧、擬議。	僧、擬議。			僧、擬議。
33	師、便喝。	師、便喝。	師、便喝。			師、便喝。

※ 表二」Aの「五燈會元續略」以降に編纂されたB～Fにのみ見える事例は、ゴシック體で表記している。

元賢輯『繼燈錄』卷第一（清順治八年〔一六五〕編纂）（X.T.86, p.505b~）

通問編・施沛彙集『續燈存彙』卷一一（清康熙四年〔一六六五〕編纂）（X.T.84, p.780c~）

聶先編『續指月錄』卷八（清康熙十九年〔一六八〇〕編纂）（X.T.84, p.87b~）

紀陰撰『宗統編年』卷二五（清康熙二十九年〔一六九〇〕編纂）（X.T.86, p.251b~）

性統集『續燈正統』卷三六（清康熙三十年〔一六九一〕編纂）（X.T.84, p.610a~）

超永編輯・超揆較閱『五燈全書』卷六一（清康熙三十六年〔一六九七〕編纂）（X.T.82, p.256c~）

これら福裕の傳の間には、相互に少なからず異同が見受けられる。その異同を確認する爲に、各傳に示された事跡を「表一」、雪庭福裕の傳記史料」（以下、「表二」として、また、各傳に掲載される禪問答を示した「表二、問答對應表」（以下「表二」）を作成した。なお、先に挙げた典籍の中では、『五燈會元續略』が最も早く編纂されているので、それ以後の傳にのみ見える字句については、ゴシック體で表記した。

まず、「表一」を見ると、共通の記述が多いものと、大きく異なるものがあることの差異に氣がつく。その中で共通の記述をするものは『五燈會元續略』・『續燈存彙』・『續指月錄』・『續燈正統』・『五燈全書』の傳で、それらは最も早く編纂された『五燈會元續略』の記事を踏襲しているものと思われる。ただ、その『五燈會元續略』と同じ系統である傳の中でも若干の異同がある。例えば『續燈正統』（「表二」h）は、内容は一致するものの『五燈會元續略』の傳とは違い、年次を明確に記す部分（「表二」h/1・7）がある。また「師五齡解語、日了千言。」という、福裕の五歳の時の記事（「表二」2）については、『繼燈錄』（「表二」d）に見え、『繼燈錄』以後に成立した傳にもそれが祖述されている。

一方、『五燈會元續略』と違う言葉を使用するのは、『補續高僧傳』（「表二」c）と『宗統編年』（「表二」g）である。前者は、明らかに『五燈會元續略』系統の傳とは内容が異なる記事があり、『宗統編年』は「壬辰五年、萬壽祖退居

從容庵。禪師福裕、補住萬壽。」(「表一」9)など、『五燈會元續略』系統の傳と異なる事跡を記載している。

次に「表二」をみると、『五燈會元續略』の記述する問答と『續燈存彙』のそれは(「表二」A・C)、同じ内容であるが、編纂順序として兩者の中間に存在する『繼燈錄』(「表二」B)は、『五燈會元續略』の傳には見られない問答を記載している。その別の問答とは『繼燈錄』以外の傳が記さないものであり、『繼燈錄』のみに記載される。そして、『續指月錄』の記述する問答は、『五燈會元續略』のそれに準じつつも達磨の面壁についての問答(「表二」D・25・30)が記されているが、しかし、『五燈會元續略』・『繼燈錄』・『續燈存彙』の記述する「表二」の(31・33)の問答が無い。また『續燈正統』の記述する問答は『五燈會元續略』のそれに準ずるが、またそれとは別の問答(「表二」E・16・24)が記されている。五つの傳の中で最後に編纂された『五燈全書』は、『續指月錄』にある問答を踏襲している。

「表一」と「表二」を見ると、「表一」4の福裕が世變に遭ったという記述と、「表一」8の萬松行秀へ參じたことを示す記述などは、『五燈會元續略』以後に成立した『繼燈錄』・『續燈存彙』・『續指月錄』・『續燈正統』・『五燈全書』の傳にも同様に祖述されており、さらに傳に記される問答については、『五燈會元續略』が記した問答を先と同じように『五燈會元續略』以後に成立した傳も同様に記している。そのことから、典籍史料の中で最初に編纂された『五燈會元續略』をもとに『繼燈錄』・『續燈存彙』・『續指月錄』・『續燈正統』・『五燈全書』の傳が作成されていると考えられる。しかし、その系統にあてはまらないものもある。それは『補續高僧傳』(c)・『宗統編年』(g)で、その二つは、『五燈會元續略』系統には記される問答を記さず、さらに『五燈會元續略』系統とは事跡の言い回しが異なる部分がある。したがって、福裕の傳は、『五燈會元續略』の系統と、『補續高僧傳』の系統、そして『宗統編年』の系統という、三系統があることが分かる。

そこで、まず「裕公碑」と『五燈會元續略』とを對比すると(「表一」a・b)、⁽¹⁸⁾「裕公碑」の記事は、事跡を時代順

に並べて記載していないが、その内容自體は『五燈會元續略』の記事と概ね一致する。しかし、『五燈會元續略』の記事には、「裕公碑」に見えない記事が見える（表一） $b/4 \cdot 8 \cdot 10^{(19)}$ 。次に「裕公碑」と『補續高僧傳』の記事とを對比すると、兩者とも同様の記事が記されている（表一） $c/3 \cdot 4 \cdot 8$ 。ただ、『補續高僧傳』は、福裕が少林寺に住したことが、一二四五年（脱列哥那四年）と、一二七一年（至元八年）以降の二度あることを記しており（表一、 $d/12 \cdot 19$ ）、これは、「裕公碑」①「歲乙巳（一二四五）、世祖潛邸、命師少林大資戒會。」という記述と、⑧の「其住少林也。萬松老師實爲之主。屬嵩少煨燼之餘、暫憩緱氏之永慶。」の記述の順序を、『補續高僧傳』の著者である明河が誤解して記載したとも考えられる。そして、『補續高僧傳』の記事が、「裕公碑」に類似していること、加えて、『五燈會元續略』系統には記される問答が記されないことから見ると、『補續高僧傳』は「裕公碑」をもとに作成されたと考えられよう。⁽²⁰⁾最後に『宗統編年』については、前半部分を見る限り、『五燈會元續略』系統の傳を參考にしているように見えるが、「表一」の（ $g/9 \cdot 11 \cdot 13$ ）の記述など、明らかに異なる系統の事跡を掲載する。そして、『宗統編年』より後に編纂された『續燈正統』・『五燈全書』の傳を見ても、『宗統編年』の記載は、引かれていない。

このように、表をもとに考察した結果、先の三系統はどれも「裕公碑」を参照していることが分かった。しかし、『五燈會元續略』の系統が、問答を記載していることや、『宗統編年』に、他の二つの系統とは異なる記載があることから、「裕公碑」以外にも、各傳のベースとなったものがあつたと考えられる。⁽²¹⁾そのことについてみると「慧慶碑」に、辛亥（一二二一）夏、迭授伯顔帖木兒王旨加今號、領洛陽西白馬寺竹林、奉先雲溪。六月、至寺樹碑二、雪庭著述刊諸梓。

と記され、一二二一（至大四）年に福裕の著述が刊行されたとあり、また、王惲『秋澗先生大全文集』卷四三には、「雪庭裕公和尚語錄序」・「雪庭裕和尚詩集序」という文が収められている。このことから、福裕に關しては、語錄と

詩集というものが作られていたことが分かるが、語録と詩集の本文は散逸しており、その内容までは確認できない。⁽²²⁾しかし、このようなことから、典籍に収録される福裕の傳記の中にも、彼の事跡を探るのに有効なものがあると考えられる。

三 事跡の考察

先の一章において「裕公碑」に記される事跡部分を列記し、二章では、典籍史料を確認し、その系統を確認した。本章では、先に指摘した「裕公碑」に記される記事をベースに、彼の弟子に関する碑刻・典籍史料等を用いて検討し、事跡を跡付ける作業を行いたい。

【福裕の生卒年】 まず、確認しなければならないのは、生卒年である。「裕公碑」には、

始終萬壽十四夏、主護之力居多。既老、倦於接納、歸棲高曜。未久、示微疾、書偈告終、俗壽七十三、僧臘五十二。(裕公碑⑤)

と、卒した時の年齢が七三歳であったという記載があるだけで、その年次については明確にしていない。しかし、別の記録ではそれを見ることが出来る。「慧慶碑」は、福裕の卒年について、

乙亥(二七五)秋、雪庭圓寂、實七月二十日也。

と明記しており、『五燈會元續略』には、

乙亥(二七五)秋七月二十日、示微疾書偈告終。俗壽七十三、臘五十二。

という記載がある。また『續燈正統』には、

太原文水張氏子。生宋寧宗嘉泰癸亥（一二〇三）。

と、生年が記されている。生年を記す他の史料が見当たらないこと、また『續燈正統』が、『五燈會元續略』より後に編纂されていることなどからみると、この生年は『五燈會元續略』に記される卒年から逆算したとみてよいのではないだろうか。したがって「慧慶碑」および傳にある「一二七五年（至元二二）」を福裕の卒年と確定してよからう。

また「裕公碑」には、幼少期の福裕の事跡として、

九齡入學、日了千言（「裕公碑」⑩）。

と記されている。その九歳という年齢に生年をあてはめると、それは一二二二年（太祖七・壬申）の状況であることになる。「裕公碑」では、記載される順序が前後しており、これに續く状況については分かり難いが、『五燈會元續略』には、九歳の記述の直後に、

未幾、適遭前金貞祐俶擾、失天倫所在、瑣然無依。

と記されている。それを「裕公碑」で見ると、對應する部分は、

幼遭世變、瑣然無依。（「裕公碑」⑥）

という一文になる。また『五燈會元續略』に、九歳（一二二二年）の記事に續いて「未幾」と記され、さらに「前金貞祐俶擾」とある。この「裕公碑」にも「幼遭世變」と記される「世變」とは、モンゴルの對金國作戰によって、一二一四年に金が中都から開封へと都を移す、いわゆる貞祐の南遷にかかわる事柄を指すのであろう。そして、『元史』卷一・太祖本紀・太祖八年（一二二三）には、

是秋、分兵三道、命皇子朮赤、察合臺、窩闊臺爲右軍、循太行而南、……（中略）……掠澤・潞・遼・沁・平陽・太原・吉・隰、拔汾・石・嵐・忻・代・武等州而還。

と記されており、金を包圍する途中、皇子の朮赤・察合臺・窩闊臺が率いる右翼軍が、福裕の出身地である太原を攻

略している。この世變という事柄がおおむね合致することからも、一二〇三年生れ、一二七五年卒であろう。そして、「世變」に遭ったのは一二二三—一二二四年の間、福裕が一〇—一一歳のことになる。

【燕京への移動】 萬松行秀に參じた年について「裕公碑」には、

遊方來燕、親炙萬松師又十年。（「裕公碑」⑦）

と記される。先に検討した、福裕の九歳の事柄から事跡を追ってみると、「裕公碑」には、

幼遭世變、愴然無依。道逢老比丘、勸以學佛曰、能誦法華足矣。師曰、佛法止是乎。比丘異之、與偕謁休林古佛於僊巖、曰此龍象種也。當爲大器。卽爲祝髮授具、與雙谿廣公同執事者七年。（「裕公碑」⑥）

と、福裕は、世變に遭い、身寄りがいなくなった後、老比丘に會つて、休林古佛のもとで具足戒を受け、雙谿廣公と七年間執事したとある。彼の生年（一二〇三）より計算すれば、一〇歳—一一歳（一二二三—一二二四）ごろに貞祐の南遷に巻き込まれ、そのあとに具足戒を受けて執事しはじめるので、「裕公碑」の記載に準ずれば、雙谿廣公と執事した七年間は、一〇歳—一一歳（一二二三—一二二四）から一七—一八歳（一二三〇—一二三二）までのことになる。しかし、彼の卒年と僧臘は、

俗壽七十三、僧臘五十二。（「裕公碑」⑤）

と記されており、それによれば、具足戒を受けたのが二歳の時となり、「裕公碑」の本文に記される事跡と一致しない。

一方、典籍史料に記される傳でも、この時期について二説あり、『續燈正統』は、執事しはじめた年について、當嘉定甲申（一二二四）、與雙谿廣、同事者七年。次參萬松於燕之報恩、……

と、それが一二二四年（二二歳）のことであると記し、先の僧臘と一致する。そうすると、七年間執事した後、一二二

三二一年に萬松に參じたことになる。しかし『宗統編年』は、萬松に參じた年を、

壬午十五年（一二三三）⁽²³⁾、禪師福裕、參萬松祖、印可之。

と記し、『續燈正統』と食い違いをみせる。

そこで、『五燈會元續略』に記される傳により、萬松に參じた年について見ると、

時萬松、住燕之報恩。師不通介紹、輒獨掉臂以往。松一見、便許印可。從此親炙者又十年。

と記されており、福裕は萬松が報恩寺に住していた時期に參じたたとある。萬松の傳のある『續指月錄』⁽²⁴⁾等によれば、萬松が報恩寺から萬壽寺に遷ったのは太宗二年（一二三〇）としているので、一二三一年に福裕が報恩寺にいた萬松に參じたとなると、先に挙げた『續燈正統』の記事と合致しない。

福裕が萬松に參じた年は、一二三二年と一二三一年のどちらが妥當であるのか。萬松の動向も踏まえると、彼は、一二三〇年には萬壽寺に遷っており、福裕が一二三一年に報恩寺にいる萬松に參じたとは考え難い。あえて推測するとすれば、一二三二年としたほうが妥當であろう。ただ、次に述べる福裕の少林寺住持の年代も合わせて時期を確定する必要がある。

【嵩山少林寺住持の時期】 「裕公碑」は、先に引いた萬松に十年參じたという記述（「裕公碑」⑦）の後、

其住少林也、萬松老師實爲之主。屬嵩少煨燼之餘、甄憩緱氏之永慶。（「裕公碑」⑧）

とだけ記し、福裕が少林寺に遷った年を記さない。それに對して、『五燈會元續略』には、

值壬辰（一二三三）之變、祖利荒蕪。尋承萬松・海雲、重以尺牘見招、遂有少林之命。

と記される。このことから、福裕は少林寺に一二三三年以降に住していることになる。⁽²⁵⁾

その、「壬辰之變」と記す一二三三年の情況について、『元史』卷二太宗本紀には、

〔太宗〕四年壬辰（一二三三）春正月戊子、帝由白坡渡河。……壬寅、攻鉤州、克之、獲金將合達。遂下商・號・嵩・汝・陝・洛・許・鄭・陳・亳・潁・壽・睢・永等州。

と記される。これは河南の鉤州でモンゴル軍と金軍との決戦が行われたという記述であるから、嵩山地區は一二三二年にモンゴルの統治下に入ったことになる。その情況を踏まえると、福裕は一二三二年以降、嵩山地區がモンゴルに統治されてから少林寺に住したのではなからうか。⁽²⁶⁾ そうすると、先に引いた、

其住少林也、萬松老師實爲之主。屬嵩少煨燼之餘、覽憩緱氏之永慶。〔裕公碑〕⑧

という記載の「屬嵩少煨燼之餘」というのは、一二三二年の金とモンゴルとの決戦後のことを指し、それ以後に福裕が少林寺住持となったものの、少林寺は戦亂の直後で居住することができず、暫くは河南省の緱氏山にある、永慶と稱する寺院に假住まいしていたということになる。

このようにみてくると、福裕が少林寺に遷ったのは一二三二年頃のことである。この結果を考慮した上で、先に提示した萬松に参じた年次を考えてみると、やはり一二三〇年以降であるとは考え難く、傳の記述と『元史』の記述を對比すれば、一二三二年に福裕が萬松に参じた、と考えるのが妥當であると思われる。

【和林興國寺住持の時期】 「裕公碑」には、

戊申（一二四八）、定宗諒住和林興國。〔裕公碑〕②

とあり、定宗の詔により和林の興國寺に住したとする。また、福裕と同時代の僧である海雲印簡の傳によれば、

丁未（一二四六）貴由皇帝即位、頒詔命師統僧、賜白金萬兩。師於昊天寺建大會爲國祈福、太子合賴察、請師入和林、延居太平興國禪寺。尊師之禮非常。〔佛祖歷代通載〕卷二一、《北京圖書館古籍珍本叢刊》七七。以下、同

と、海雲が定宗即位と同時に僧を統括する任務を與えられ、また太子の合賴察によって和林に招かれて、太平興國禪

寺に入ったとみられる。「裕公碑」には「和林興國」と記され、『佛祖歷代通載』の海雲の傳では、和林的「太平興國禪寺」とあるが、和林に「興國」という名を冠する寺院が同時期に二つあるというのは考え難いので、太平興國禪寺というのは、福裕の入った和林的興國寺と同じ寺院を指すとみられる。海雲が定宗元年（一二四六）、福裕が定宗三年（一二四八）に和林的興國寺の住持となったとすると、福裕は、海雲の住持した後、興國寺に遷ったと考えられる。

また「裕公碑」には、憲宗元年（一二五一）、憲宗より釋教を統括する任務を與えられたことを述べる、

未朞月、憲宗召詣帳殿、奏對稱旨。俾總領釋教、授都僧省之符、優復僧尼、得廢寺二百三十有七區。（「裕公碑」

②）

という記事がある。この記事の内容については、少林寺に現存する「少林寺聖旨碑」第一截に、福裕に對しての詔が記されていることから裏付けられる。⁽²⁷⁾ この頃の海雲の狀況をみると、

辛亥（一二五一）、蒙哥皇帝即位、頒降恩詔、顧遇優渥、命師復領天下僧事、蠲免差役、悉依舊制。（『佛祖歷代通

載』卷二一）

とあり、一二五一年には、海雲も、福裕と同じように僧を統括する任務が與えられている。しかし、海雲の場合は、先に舉げた傳の一二四六年の記述によれば、定宗即位の時から僧を統括する任にあつたので、一二五一年の記事には差役を免除される立場であつたこと、そして「悉依舊制。」と記されるのであろう。福裕と海雲の兩者とも、ほぼ同時期に太平興國寺に住持し、一二五一年には、ともに僧を統括する任務についていることから、福裕も定宗期にその任務に就いていたという可能性も考えられる。⁽²⁸⁾ そうすると、興國寺というのは、その歴代住持が僧を統括する立場にあつたのかも知れない。

【燕京延慶禪院住持の時期】

「裕公碑」は、先の憲宗元年（一二五一）の記事（「裕公碑」②）から、

庚申（一二六〇）、世祖即祚。因論辨僞經、馳駟以聞、火其書、仍襲爵、賜光宗正法之號。

〔裕公碑〕^③

という、一二六〇年の記事に續き、その間の九年については記載が無い。しかし、「慧慶碑」には、その間の状況を示すものとして、

丙辰、雪庭主京師延慶、有領攝之命……（「慧慶碑」）

という一二五六年の記事が見える。ここに見える「京師延慶」という語は、「延慶寺」を指すと思われる。それについては、「裕公碑」や傳には一切記述が無いが、「順天府志」⁽²⁹⁾卷八に、

十方延慶禪院、按舊記、少林雪庭光宗正法裕宗大師、具大福德、有大因緣。受憲宗皇帝宣命、乙卯歲（一二五五）、至燕延慶、禮請爲開山第一代住持。有碑記其事。至元二十一年、學士承旨安藏撰。

と、福裕が憲宗の命を受けて燕京に入り、十方延慶禪院の初代住持となったことが記されている。先の「慧慶碑」の記載よりも、一年早いことになるが、一二五五年頃に、憲宗の命によつて延慶禪院に遷ったことが裏付けられる。⁽³⁰⁾

【燕京萬壽寺住持の時期】 「裕公碑」は、

庚申、世祖即祚。因論辨僞經、馳驛以聞、火其書、仍襲爵、賜光宗正法之號。時萬壽祖席、無可當之者、衆請師主之。〔裕公碑〕^③

と、一二五五年から一二五八年まで前後三回に亘つて行われた道佛論争で、中心的役割を果たした福裕は、「光宗正法」の號を賜わり、さらに萬壽寺⁽³¹⁾に住持したことを記す。しかし、萬壽寺に遷った時期については記されていない。ただ、「裕公碑」^③の記事の後に、

始終萬壽十四夏、主護之力居多。既老、倦於接納、歸棲嵩曜。未久、示微疾、書偈告終、俗壽七十三、僧臘五十

二。(「裕公碑」)^⑤

と、萬壽寺に住持した期間が、卒する前の十四年間であったことが記される。その卒年から逆算すると、一二六〇年前後に福裕は萬壽寺に遷ったと考えられるが、「裕公碑」には、その時期については明確に記されないで、少し詳細に検討する必要がある。

「慧慶碑」には、一二六七年に福裕の弟子である足庵淨肅が少林寺に住した、

丁卯、足庵住少林、遷十州提領、召師爲侍者、知章婁。

という記載があり、足庵の道行碑である、「靈巖足庵肅公禪師道行碑」⁽³²⁾には、年次を明らかにしないものの、少林寺に遷った翌年、提領のポストが與えられたことが記される⁽³³⁾。また、これは一二六八年に出された「少林寺聖旨碑」の第三⁽³⁴⁾截の記事と一致し、それによって足庵が少林寺住持となったのが一二六七年でその時には福裕は少林寺に居なかったことが裏付けられる。

そこで、もう一度福裕の事跡に戻ってみたい。前出の「裕公碑」^③に、世祖が即位したとき(一二六〇年)、福裕が號を賜わり、萬壽寺に住したということが記されていた。この一文によれば、萬壽寺には一二六〇年以後に遷ったと考えられる。また、「靈巖足庵肅公禪師道行碑」にも、

後雪庭掌天下僧權、而主萬壽。

という一文が記される。この文に見える「天下の僧權」とは、まさしく一二六一年に出された「少林寺聖旨碑」第二⁽³⁵⁾截に記される、「漢地にいる佛僧たちを率いる」役目のことであろう。この聖旨は少林寺に出されていることから、その聖旨を受領したあと、同年に萬壽寺に遷ったと考えられる。

さて、先の萬壽寺に住持した期間の福裕の動向として、「慧慶碑」には、

壬戌(一二六二)、雪庭復命定住懷州柏巖・五里化成等寺、師從之。甲子秋、還少林。

という記載がある。これについては、福裕が慧慶に命じて懷州柏巖寺、五里化成寺等の寺院に住持させたと考えられる。さらに「慧慶碑」には、

乙丑（一二六五）、嵩少有寇禦之擾、既殄法王、因亦蕪廢、雪庭請復庵、兼住其寺而經理之……

という一文も見える。ここにいう「復庵」とは、福裕と同じ萬松行秀門下の復庵圓照と思われ、彼の傳に法王寺に住した「次遷齊河之普照・鵲里之崇孝・登封之法王・京師之萬壽。後仍歸宿普照。」との記載があることから、福裕が復庵に、法王寺を復興させたということであろう。

【燕京萬壽寺から上都華嚴寺へ】 「裕公碑」では、福裕の萬壽寺在任時期を一四年としている（「裕公碑」⑤）。しかし、他の碑刻の彼に關する記述を確認すると、萬壽寺在任時期が合致しない記述がみられる。ここで「裕公碑」に記されていない萬壽寺に住持した時期の後のことに少し觸れておきたい。

福裕と同門の乳峰老人の塔銘「少林寺乳峰仁公禪師塔志銘」⁽³⁷⁾には、

俄奉詔旨、俾領燕京之萬壽。未幾、賜以正宗興教大禪師之號。以師年邁固辭、不許。忽感微疾、而泊然終於丈室。至元三年（一二六六）丙寅二月二十有二日也。

と、乳峰老人が至元三年（一二六六）春三月以前に萬壽寺に遷ったことを記す。この記述に従えば、福裕は一二六六年前に萬壽寺を離れているはずである。その萬壽寺からの移動を裏付けるものとして、福裕と同じく萬松門下の全一至溫の塔銘、「佛國普安溫禪師塔銘」⁽³⁸⁾がある。それには、

至順二年夏、上都大龍光華嚴禪寺住持、僧法琳言、昔在憲宗皇帝癸丑之歲、世祖皇帝嘗命我開山溫公、統釋氏於中原。後五年、丙辰之歲、始城上都、又三年、戊午之歲、作大龍光華嚴寺、寺於城東北隅、溫公主之。溫去世、而少林雪庭裕公主之。裕公去之二十年、竹齋誼公・屏岩頤公・雲松微公・至於我先師筠軒壽六世矣。

と記され、全一の没後、福裕が上都華嚴寺の住持となったという。全一の卒年は、典籍史料⁽³⁹⁾によれば至元丁卯（二二六七年）で、これは乳峰老人の萬壽寺に遷った時期とも重なるので、まさに上都華嚴寺住持の缺員を補うために、福裕が萬壽寺より上都華嚴寺に遷ったとも十分に考えられる。上述した福裕の萬壽寺に遷った時の状況と、上都華嚴寺に遷ったという事柄を併せ見ると、世祖より聖旨が出された後、すぐに萬壽寺に遷り、およそ四年で上都華嚴寺住持に就任することになる。しかし、その後の状況として、「慧慶碑」には、

癸酉（二二七三）秋、（慧慶）陞提點、如京師上言總統所、乞雪庭佚老。少林從之。甲戌（二二七四）夏、抵其寺。乙亥（二二七五）秋、雪庭圓寂、實七月二十日也。十一月、萬壽遣僧迎其柩、師護喪葬之漆園。

とあり、一二七三年、慧慶が總統所に對して福裕を退任させる上奏を行い、その結果、一二七四年に福裕が少林寺に戻った。そして一二七五年、福裕が卒した際に、萬壽寺の僧が柩を迎えに來たと記すことから、少林寺に戻る直前には、萬壽寺に居たとも考えられる。とすれば、全一の塔銘に記される、福裕が上都華嚴寺に住持したということについてはまだまだ疑問が残る。或いは、住持であつたとしても、在任期間は、ほんの数年であつたと考えられる⁽⁴⁰⁾。

【五少林の記述】「裕公碑」には、

尋分建和林・燕薊・長安・太原・洛陽、爲五少林。（裕公碑）⁽⁴¹⁾

と、五都市に寺を建立し、それを五少林としたということが記されている。無谷・姚遠編『少林寺資料集續編』⁽⁴¹⁾（書目典籍出版社『文獻百科知識叢書』一九八四年）では、その五少林について言及されているが、燕薊の少林寺が實際に存在したということ以外、その存在が明確にはされていない。ここで、そこに言う嵩山以外の少林寺について一考しておきたい。

『至三元辯偽錄』（北京圖書館古籍珍本叢刊）七七所收。以下、『辯偽錄』卷三には、既に先行研究⁽⁴²⁾でも明らかにされてい

る通り、前後三回に涉つて行われた道佛論争の顛末が記される。そこに論争の發端となる部分、一二五五年のことについて、

時少林長老裕公、建寺鵲林。⁽⁴³⁾〔辯偽錄〕卷三

と、福裕が和林で寺を建てたという一文が記されている。さらに、福裕と道士の李志常が帝前で論争を行うのであるが（一回目の論争）、それが終わった後に、福裕自身が上奏する。その上奏文の冒頭にも、

和林上都北少林寺嗣祖雪庭野人、誠惶誠恐、頓首頓首謹言……〔辯偽錄〕卷三、《TT 52, p. 0768b-》

とあり、その中に「和林上都北少林寺⁽⁴⁴⁾」という寺名が見える。一方、「裕公碑」の五少林の記載には、和林の名前も記されており、それが、この「和林北少林寺」を指すのであろう。つまり、福裕は、一二四八年頃、和林興國寺に住し、それから一二五五年、延慶禪院に遷るまでの七年間は和林に滞在しており、その滞在期間中、和林に少林寺を建立したと考えられる。

そして、一二五六年、二回目の論争時には、道士側が参列せず、その結果、

帝謂諸師曰、道家既不肯來。必是理短、不敢持論。却令僧衆、乘驛還燕。乃丙辰年（一二五六）九月十日也。

〔辯偽錄〕卷三、

とある。この二回目の論争の僧衆の中に、福裕も含まれており、⁽⁴⁵⁾皇帝が僧衆を「燕京」に歸らせたとあるから、先に引いた『順天府志』の記す通り、福裕は一二五五年中には、燕京の延慶寺に遷っていることになろう。

さて、從來、五少林の中で、福裕の門弟の東川圓讓が記した「薊州盤山北少林禪寺住持威公禪師塔記」⁽⁴⁷⁾の内容をもとにして、燕薊少林寺の存在は明らかにされていた。その塔記の主人公、雲威禪師という人物も福裕の門弟にあたる。⁽⁴⁶⁾その塔記には、

中統間、都總統少林大宗師、事屆王山、一語相得。驛負之燕、一居萬壽。……是時、薊州盤山法興虛席、命師立

僧接武。明年、新巢雲軒、仍以巢雲自號。宣政院使脫因公、爲之外護、具奏朝廷、特慰祐、更法興爲北少林禪寺。と、福裕が命令して雲威禪師を萬壽寺に配置し、さらに命令して雲威禪師を天津の盤山法興寺に住せしめ、その法興寺が、宣政院使の脫因という人物の上奏によつて特別に加護され、北少林寺と名稱を改めたとある。そして、その法興寺については、『辯偽錄』卷三に、

初盤山中盤法興寺、亥子年間、天兵始過、罕有僧人。海山本無老師之嗣振公長老、首居上方。橡栗充糧、以度朝夕。全眞之徒、挾丘公之力、謀占中盤。乃就振公、假言借住。振公以謂道人棲宿、猶勝荒涼。且令權止占居。既久、遂規永定王道政陳知觀、吳先生等、乃改拆殿宇、打損佛像。又冒奏國母太后娘娘、立碑改額、爲棲雲觀院。……又共那摩大師少林長老、朝覲蒙哥皇帝、具陳其事。聖旨委付今上皇帝。改正其弊、却爲僧院。即戊午年（一二五八）九月初四日也。

と記されており、その寺は道佛論争の最中、全眞教徒に占領され、それを福裕と那摩大師が上奏したことによつて、佛教側に返還された寺であつた。さらに法興寺の名を北少林寺に改めたのが、中統年間であることを踏まえれば、道佛論争後に福裕に與えられた褒美の一つとも考えられる。

福裕が建立したとされる和林北少林寺、そして、中統年間に寺名を變更した薊州盤山北少林寺の二寺院の存在が明らかになつた。⁽⁴⁹⁾和林の少林寺が一二五五年頃、薊州の少林寺が一二六〇年から一二六四年の建立と考えれば、「裕公碑」に記される五少林の順位は、建立順に並んでいる可能性がある。しかしながら、長安・太原・洛陽の残り三つの少林寺の建立年次と所在の事柄については、今のところ據るべき史料がなく、明らかにすることはできない。

おわりに

本稿では、元初に活躍した僧の一人として、注目はされつつも主題として採り上げられていなかった福裕の事跡を考證してきた。その結果は、すでに本文中で述べ、さらに「表一」aに概略的に示したが、今一度、その典籍史料の系統とともに要點をまとめておきたい。

1、「裕公碑」と典籍史料に記される福裕の傳を對比した結果、傳には『五燈會元續略』系統と、『補續高僧傳』系統、そして、『宗統編年』系統の三系統があることが分かった。この中で『補續高僧傳』の傳は、「裕公碑」と内容が似通っており、「裕公碑」をベースにしているといえる。また『五燈會元續略』の系統の傳は、「裕公碑」を踏まえた上で、さらに事跡を補足しているところが見えることから、「裕公碑」以外にもベースとなった史料があったことが窺える。禪の問答などが記述されていることから、おそらく、そのベースとなったものの中には、王惲『秋澗先生大全文集』に「雪庭裕公和尚語錄序」・「雪庭裕和尚詩集序」とある、福裕の語錄・詩集の本文も含まれているものと考えられる。さらに『宗統編年』は、傳の前半において『五燈會元續略』の系統を参考にしているものの、後半部分では、上記系統には見られない事跡を掲載する。しかし、その典據は分からない。なお『續燈正統』・『五燈全書』は、『宗統編年』より後に編纂されたが、『宗統編年』の記事は掲載せず、『五燈會元續略』に依っている。

2、福裕は、一二〇三年（金・泰和九）に生まれて、一二一三年に山西周邊で起こった戦亂によって、親族と離散し、據り所が無くなって、佛門に入った。そして休林古佛のもとで受具した後、七年間執事を務める。その後、一二二三年前後から萬松に十年間参じ、一二三三年頃には、モンゴルの統治下となった少林寺に住する。さらに

一二四八年に和林の興國寺に、一二五一年には憲宗から釋教を統括する任務を與えられ、一二五五年頃に憲宗の命によつて燕京に行き、延慶禪院の初代住持となる。一二六一年、ついで世祖の聖旨によつて僧尼を統括する任務に就き、その後すぐに萬壽寺に遷る。萬壽寺住持であつたのは、「裕公碑」によれば、一四年間であるが、「少林寺乳峰仁公禪師塔志銘」に、福裕の萬壽寺在任時期に別の僧が萬壽寺に住したという記載があり、矛盾が生じている。しかし、「少林寺乳峰仁公禪師塔志銘」以外にはより明確な史料が無いので、ここでは、「裕公碑」に従つておきたい。そして福裕は、一二七四年に少林寺に戻り、一二七五年の秋に卒しているので、晩年の約一年間は、少林寺で隱居していたと思われる。

一方、これから解明すべき點もいくつか浮かび上がつてきた。例えば、復庵・足庵・慧慶など、福裕と同門あるいは門弟が彼の人選によつて少林寺や萬壽寺などに遷住していることが弟子の碑刻に見えるが、このような僧の動向をより詳細に検討することにより、僧尼を統括する任務の實態の把握に繋がっていくように思う。また「裕公碑」の立石は、福裕の没後三五年經過した一二三〇年に、弟子の慧慶の上奏によつてなされているが、それが、武宗から仁宗への帝位の交代や、釋教都總統廢止など宗教政策の轉換の時期と重なっていることを考え合わせると、本碑立石には政治的な動きとの關連が推測される。これらの問題については、佛教界内部の動向に限らず、元朝治下における佛教と政治との關係を明らかにする一方法として、今後の課題としたい。

註

- (1) 永井政之「萬松行秀の傳記をめぐる諸問題——資料・洪濟寺・舍利塔——」(『飯田利行博士古稀記念東洋學術論叢』所收 四八五—五〇八頁國書刊行會 一九八一年) 參照。岩井(圀下) 大慧「元初に於ける帝室と禪僧

との關係に就いて(上)・(下)」(『日支佛教史論攷』東洋文庫、一九五七年。原載、『東洋學報』一一—四所收、八七一—二七頁、一九二二年／『東洋學報』二二—一所收八九—一二四頁、一九二三年)、阿部肇一「萬松行秀傳と『湛然居士集』——金代曹洞禪の發展——」

(1) 『アジア諸民族における社會と文化——岡本敬二先生退官記念論集——』國書刊行會、一九八四年 所收、一六五—一八五) 阿部肇一「元初臨濟僧海雲寺印簡の活躍」

(2) 『駒澤史學』第四一號—一三二頁

(2) 耶律楚材(一一九〇—一二四四)字は晉卿。モンゴル軍により、金の中都が包圍された際、彼は居士として萬松の下へ參じ、盡くその法を得たとされ、著書に『湛然居士文集』がある。日本では、古くから名臣とされ、杉山正明『耶律楚材とその時代』(白帝社、一九九六年)、飯田利行『大モンゴル禪人宰相耶律楚材』(柏美術出版株式會社、一九九四)等、詳細な研究がある。

(3) 禪僧の場合は通常、號を以て表記するが、本稿では、雪庭福裕の場合に限り、「裕公碑」との關連性を表す爲に「福裕」と表記する。

(4) 野上俊靜「元代道・佛二教の確執」(『元史釋老傳の研究』所收、野上俊靜博士頌壽記念刊行會、一九八一年。原載『大谷大學研究年報』二、一九四三年) 窪德忠「モンゴル朝佛道論爭研究序説」(『モンゴル朝の道教と佛教——二教の論爭を中心に——』平河出版社、一九九二年原載、『結城教授頌壽記念佛教思想史論集』所收、原題「元代佛道論爭研究序説」) 中村淳「モンゴル時代の『道佛論爭』の實像——クビライの中國支配への道——」(『東洋學報』七五、所收三三—五七頁、一九九四年) 參照。

(5) 憲宗期における道佛論爭の内容については、『辯偽錄』で知る事ができる。しかし、その史料價值を疑問視する研究もあり、前掲註(4)、窪論文は、『辯偽錄』の著述する矛盾や誤りを指摘している。

(6) 福裕については、前掲註(1)、岩井論文、前掲註(4)、野上論文・窪論文等で、傳記史料を用いて考察されている。

(7) 後述するが、ここでは、史料として明・清代に編纂された『五燈會元續略』等の傳記類を使用する。この傳記類に關しては、便宜上、「傳」と稱する。

(8) 拓影は、増田龜三郎・岡田榮太郎編『菩提達磨高山史蹟大觀』(一九三二年、鷲尾順敬監修『菩提達磨高山史蹟大觀』一九八一年として復刊。)、『中國文化史蹟』等にあり、また、『嵩陽石刻集記』卷下(『石刻史料新編』第二輯一四、新文豐出版公司)、『程雪樓文集』卷八(『元代珍本文集彙刊』國立中央圖書館、一九七〇所收)『嵩岳文志』卷六、『嵩書』卷二、(共に『嵩岳文獻叢刊』中州古籍出版社、二〇〇三年)に移録が收められる。本稿では、『菩提達磨高山史蹟大觀』の拓影と、ウェブ上で公開されているデータベース「京都大學人文科學研究所所藏石刻拓本史料」(<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/ingsrv/takuhon/>)「GEN0093A」の拓影をもとに移録したものをを使用した。

(9) 常盤大定『支那佛教史蹟踏査記』(支那佛教史蹟踏査

記刊行會 一九三八年)

(10) 黃明蘭・朱亮編著『洛陽名碑集釋』(朝華出版社 二〇〇三年)

(11) 宮紀子『モンゴル時代の出版文化』(名古屋大學出版會 二〇〇六年)で、趙孟頫との關係や、その動向が研究されている。

(12) 櫻井智美『趙孟頫の活動とその背景』(『東洋史研究』五六―四)で、世祖と仁宗が篤く任用していることが明らかにされ、さらに、卷末に附される「リスト2」によれば、仁宗期(皇慶元年―延祐七年、一三二一―一三三〇)の八年間で、六七の碑刻の立石に關わっている。

(13) 『元史』の趙孟頫傳には、「初、孟頫以程鉅夫薦、起家爲郎、及鉅夫爲翰林學士承旨、求致仕去、孟頫代之、先往拜其門、而後入院、時人以爲衣冠盛事。」と記される。また、この二人の關係については、當時の佛教界においても重要なことであると思われるので、今後、検討を要することであろう。

(14) 『程雪樓文集』卷八に收められる「陳氏之先德之碑」に、「從翰林學士承旨安藏事徽仁裕聖皇后、安藏深釋教、后乃命顯祝髮受戒。……武宗命以資德大夫、爲釋教都總統。」と、仁宗期以前の陳顥の事跡が記される。そこから徽仁裕聖皇后が陳顥に僧になるように命じ、さらに武宗が、地方の佛教者を統括する、釋教都總統に陳顥を置いたということが判る。しかし、「陳氏先顥之碑」以外

に、陳顥が佛教者であったことを示すのは、『續燈正統』卷一の目録に慧慶禪師法嗣として陳顥の名前が見えるだけである。また、桂華淳祥「石刻史料よりみた元代華北の佛教統領機構について——諸路釋教都總統を中心に——」森田憲司「十三、十四世紀東アジア諸言語史料の總合的研究——元朝史料學の構築のために」(奈良大學 平成十六年度―平成十八年度科學研究費補助金基盤研究B 研究成果報告書、二〇〇七年三月、九四―一六)所收(一一四頁)では、彼の名前が「裕公碑」以外の少林寺僧の碑にも見え、「請疏碑」の他、「少林寺第十代妙嚴弘法大禪師古嚴就公和尚道行碑銘並序」・「慧慶碑」に名前が見えることを指摘しており、また、註(11) 宮前掲書も同様に、陳顥が少林寺・靈巖寺と縁があったと指摘している(一四五頁)。

(15) 「慧慶碑」をはじめ、主なものとして、「少林寺乳峰仁公禪師塔志銘」・「佛國普安溫禪師塔銘」・「靈巖足庵肅公禪師道行碑」が挙げられる。

(16) 「中國古代碑帖拓本」(北京圖書館・香港中文大學文物館、二〇〇一年) 參照(一三七―一三八頁)。村岡倫「元代永寧王家の系譜とその投下領」(『東洋史苑』六六)によれば、「慧慶碑」は、一七四八―一九二一年の間に失われ、「中國古代碑帖拓本」に寫眞が載る拓本だけが現存している。

(17) 釋教都總統については、前掲註(14)、桂華論文が詳

しく、その成立や、歴代の總統について述べている。

- (18) 表一では、對比し易いように、僧傳類をもとにして、「裕公碑」の事跡の時期を入れ替えた。

- (19) 「裕公碑」と違う記載の部分は、「表二」に下線を引いている。

- (20) 本稿では、「補續高僧傳」を「裕公碑」の系統であるとしたが、古松崇志「法均と燕京馬鞍山の菩薩戒壇―契丹（遼）における大乘菩薩戒の流行―」（『東洋史研究』六五―三）も同様に、「補續高僧傳」が、典籍史料のみならず碑刻も使用して編纂されたものであることについて觸れられている（四一二頁）。

- (21) 「表一」「表二」を確認すると、どの典籍史料も「慧慶碑」が記す福裕の事跡を載せないことから、「慧慶碑」は、參考されていないことが分かる。

- (22) 椎名宏雄『宋元版禪籍の研究』（大東出版社 一九九三年）の附録二「宋金元版禪籍逸書目録」に「雪庭裕公和尚語録」の名前が記載される。

- (23) 「壬午十五年」という表記は、「壬午」が、干支で二二二二年を指し、「十五年」は南宋の年號、嘉定十五年を指している。

- (24) 萬松の傳は、『五燈會元續略』卷一、『五燈嚴統』卷一四、『五燈全書』卷六一、『續指月錄』卷七、『續燈正統』卷三五、『續燈存彙』卷一一、『續燈錄』卷一にある。前掲註（一）、永井論文參照。

- (25) 「宗統編年」のみ、「壬辰五年、萬壽祖退居從容庵。禪師福裕、補住萬壽。」と記す。そして、『補續高僧傳』は、

福裕が少林寺に遷ったことについて、「世祖居潛邸、命師入少林、作資戒會。……至元八年春、詔天下釋子大集於京師。……時少林虛席、萬松海雲爲之請、上目師曰、師昔主資戒會、於是有緣、煩領衆一行。屬少林猥燼之餘、師儼臨之。」と記しており、一二四五年に行われた少林寺資戒會を「昔」と表現していることから、一二四五年以降で、さらに至元八年（一二七二）の記載の後なので、一二七〇年代に福裕が少林寺に遷ったと考證しているようである。しかし、一二七〇年代になると、『五燈會元續略』系統の傳が記す萬松と海雲の關與についても、二人が既に卒しているので考え難く、史實としては信憑性に缺ける。

- (26) 「裕公碑」の題が「大元贈大司空開府儀同三司追封晉國公少林開山光宗正法大禪師裕公之碑」と、福裕のことを「少林開山」と稱していることから、彼が一二三二年、嵩山一帯がモンゴル軍に統治されてから初めて入寺した住持であったと考えられる。

- (27) 中村淳・松川節「新發現の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」（『内陸アジア言語の研究』八、一九九三、一一九二頁）の「少林寺聖旨碑」第一截、兩氏の漢文面の譯文によると、「トウルグタイとブカは二人して、モンケルカンの口頭のおおせに依つて、少林長老に言つて與えよ。『我

らは、お前を都僧省と名付けて、あらゆる漢地の佛僧たちを管轄するだけでなく、さらにウイグル・チベット・タングトのおよそやって来た佛僧たちをすべて管轄したので、都僧省と名付けた。』(以下、略)とある(三三頁)。

- (28) 前掲註(4)、中村論文では、「少林寺聖旨碑」第一截を再考し、定宗時代に福裕が海雲と同じく、和林的僧を統括する任務についていたことを明らかにしている(四六頁)。しかし、海雲の傳には、彼がどの地區を統括したかまでは記載されない。

- (29) 本稿では、『北京大學圖書館藏善本叢書』所收の『光緒順天府志』(北京大學出版社、一九八三年)に據った。

- (30) 元代における十方住持制については、西尾賢隆「元朝の江南統治における佛教」(『中國近世における國家と禪宗』思文閣出版、二〇〇六年、原載、『佛教史學』一五一、一九七一年)で明らかにされている。しかし、華北における制度については、未だ不透明な部分が多く、制度上は規定されていたと考えられるが、福裕や、彼の門弟の碑刻を見る限り、実際には例外も多々あったと思われる。

- (31) 萬壽寺には、萬松行秀より四代前の青州希辦より、萬松行秀・雪庭福裕・足菴淨肅・古巖普就と、萬松行秀の法嗣がその歴代住持となった。萬松行秀・雪庭福裕・足菴淨肅・古巖普就の四人の傳を見ると、概ね晩年に萬壽

寺に選つてゐることから、少林寺よりも重要な據點であつたとも考えられる。中村淳「クビライ時代初期における華北佛教界——曹洞宗教團とチベット佛僧バクバとの關係を中心として——」(『駒澤史學』五四、一九九九年)では、元代における曹洞宗の本山的な役割を果たしていたとされる(八二—八四頁)。

- (32) 桂華淳祥編「金元代石刻史料集 靈巖寺碑刻」(『大陸大學眞宗總合研究所研究紀要』一三、二〇〇五年) 參照(五五頁—六〇頁)。

- (33) 「靈巖足庵肅公禪師道行碑」によれば、足庵は、「當時嵩少闕人、就命開法於萬壽之堂。越明年、宣授河南府僧尼都提領。居九祀……次主靈巖寺八載、……會萬壽虛席、命補其處……」と、少林寺の住持が缺員となつたので、その住持の命を引き受け、萬壽寺で開法し、次の年に河南府僧尼都提領となつて、そのポストに九年、その後、靈巖寺の住持の任に八年就き、萬壽寺に選つてゐる。萬壽寺に選つた時期は、足庵の弟子にあたる古巖普就の道行碑「靈巖寺第三十三代古巖就公道行之碑」(前掲(32)、桂華編史料集參照。七六頁)に、「謁靈巖足菴肅、朝〔晚〕問道、如救頭然、依棲八載。迨至元十三年、赴順德・大都兩處……及至元十八年、當是時、萬壽虛席、命足菴住持……」と、至元十八年(一二八二)のことであると明記される。逆算すると、萬壽寺住持の時期は一二七三年から一二八一年の間で、これは、古巖が八年間

靈巖寺で足庵に依棲したという記事と一致する。だが「靈巖足庵肅公禪師道行碑」では、都提領の任が解かれた時に靈巖寺に住するようにも見える。一二七三年から九年前となると、一二六四年となり、「慧慶碑」とのずれが生じる。そこで、「少林寺聖旨碑」に書かれた内容を確認すると、一二六一年に出された第二載が、福裕を対象にするのに對して、一二六八年に出された第三載は、足庵の名前が見える。このことから、「慧慶碑」にも記され、「靈巖足庵肅公禪師道行碑」にも記される都提領のポストが、一二六八年一月に發せられていることが判り、そうすれば、「靈巖足庵肅公禪師道行碑」の「越明年、宣授河南府僧尼都提領。」という記載と合致し、都提領の在任は、一二六八年から一二七七年までの九年間、少林寺在住時期と靈巖寺在住時期を跨ぐ形でなされており、「慧慶碑」の記載の一二六七年に足庵が少林寺に遷ったということになる。

- (34) 前掲註(27)、中村・松川論文に收められる兩氏の「少林寺聖旨碑」第三載(一二六八年)の譯文には、「……今であつても以前のおおせに従つて、この肅長老が、河南府に屬する多くの佛僧たちに提領となつて釋迦牟尼の道によつて天を祈つて我らに祝福を與えあらしめよと言つて、この肅長老提領に保持すべきおおせを與えた。……」(四五頁)とある。

- (35) 前掲註(27)、中村・松川論文に收められる兩氏の

「少林寺聖旨碑」第二載(一二六一年)の譯文には、「チンギス・カンのおおせに『佛僧たち・ネストリウス教士たち・道士たち・ムスリム識者たちは、すべての貢納・畜税を見ず、天を祈つて我々に祝福を與えあらしめよ』と言つた。おおせの先例に従つて、これら少林長老・寶積壇主・姫庵主・聖安長老・金燈長老など五人が、バス・バクシのもとに、およそ漢地にいる多くの佛僧たちを率いて、釋迦牟尼の道によつて天を祈つて、我々に祝福を與えあらしめよと言つて、これら少林長老たちに保持すべきおおせを與えた……また佛僧たちにかかわる如何なる彼等の事々があつても、バス・バクシの言葉によつて、經の決まり通り、少林長老・寶積庵主など五人の長たちが正しく解決せよ……」(三八頁)とある。

- (36) 復庵については、『續燈正統』卷三〇・『五燈全書』卷六一に傳が有るが、どれも同じく、「出世德州大寧。次遷齊河之普照・鵲里之崇孝・登封之法王・京師之萬壽。後仍歸宿普照。元至元癸未三月六日示寂。壽七十八。僧臘六十二。」と記されており、法王寺住持を経て、萬壽寺に選つてゐることが分かる。福裕の没年が一二七五年であり、亡くなる前まで萬壽寺の住持であつたことを踏まえれば、一二八三年没の復庵は、福裕の後に、萬壽寺に選つてゐると考えられる。

- (37) 前掲註(8)、データベース「京都大學人文科學研究所藏石刻拓本史料」[GEN0012X] 参照。

- (38) 『佛祖歷代通載』卷第二十二に、虞集撰として錄される。
- (39) 『五燈會元續略』卷一に傳があり、それには、「至元丁卯（一二六七）五月示疾、右脇而逝。異香三日、茶毘。舍利無數。」と記される。他にも『五燈全書』卷三、『續指月錄』卷八、『續燈正統』卷三六、『佛祖綱目』卷四〇、『繼燈錄』卷一に傳があるが、卒年については、皆、『五燈會元續略』に準じている。
- (40) 燕京の萬壽寺と、上都の華嚴寺の住持時期の重複について、一つ考えられる方向は、杉山正明『モンゴル帝國と大元ウルス』（京都大學學術出版會、二〇〇四）第三章、「クビライと大都」でも明らかにされている、皇帝の夏陣營と冬陣營への移動であろう。福裕は一二六八年以降、夏は上都、冬は中都（燕京）に、皇帝とともに移動していたとも考えられるが、推測の域を出ない。
- (41) 本書によれば、福裕が建立したとされる五少林のうち、和林・長安・太原・洛陽の四つの少林寺は既に無いとされる。（二四六頁）
- (42) 註（4）、參照。
- (43) 『辯偽錄』の記載では、「鵲林」と「和林」という二つの地名が散見する。「鵲林」とは、「合刺鵲林」の略、カラコルムの音寫にあたり、「和林」のことを指す。
- (44) 『辯偽錄』の史料としての信憑性は、前掲註（4）、窪論文で觸れられている。その中で、福裕が「和林上都北少林寺嗣祖雪庭野人」と稱しているという記載について言及し、和林に少林寺は存在しないという觀點から、『辯偽錄』の史料價值について論證されているが、これは、本文でも明らかにした、和林北少林寺のことである。
- (45) 前掲註（27）、中村・松川論文の「少林寺聖旨碑」第一載（該當部分、三三頁）を見ると、和林にいる佛僧を統括させる任務を與えられている。その聖旨の内容から見ても福裕は一二五一年にも和林に居たということが判る。加えて、聖旨碑が少林寺にあるのは、おそらく、福裕の所在が和林であつても、その本院にあたる嵩山少林寺に與えられたと考えられる。
- (46) 『辯偽錄』卷三は二回目の論争時（一二五六）の佛教側代表者として、「那摩大師再共少林長老・奉福亭長老・統攝溫菴主・開覺遇長老……鵲林預待李志常等。共對朝廷。與先生每大行辯論。以七月十六日。」と記し、そこに福裕の名前も見える。ただ、この時期の『辯偽錄』の記載は、時期が前後している。本稿では、前掲註（4）、窪論文の記載に據った。
- (47) 『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編』（〇四八・一一一頁）所收
- (48) 「裕公碑」碑陰「大元少林開山光宗正法禪師宗派圖」に名前が載り、さらに、『續燈正統』卷一の目錄にも、福裕の法嗣として名前が載る。
- (49) 和林北少林寺については、『續指月錄』が福裕の法嗣

として「和林北寺覺印禪師」という名前が見え、和林の少林寺も、福裕が門弟を配置していたというのが分かる。

(50) 一三一四年立石の「裕公碑」は、福裕の門人である慧慶が、一三二〇年に福裕の爲に諡と碑銘を請うたことによつて建てられた（「慧慶碑」には、「庚戌《一三一〇》、復如京師爲雪庭請諡碑銘、暨護持院門事、武宗皆賜之。」とある）。慧慶は一二五六年頃までは福裕の侍僧であつたが、一二五九年には、當時の嵩山少林寺住持であつた乳峰老人の侍僧となつており、「裕公碑」において、福裕の事跡の具體的記述が少なくなる時期は、まさにそれ以後の時期と合致している。これは、程鉅夫が撰文する際に用いた福裕の情報が、慧慶が上奏すると同時に出したであろう福裕の行狀に依據していたことを物語っているように思われる。